

## 「ノーベル平和賞授賞式のサーロー節子氏の演説」

2017年12月16日

今年のノーベル平和賞は核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）が授賞した。ICANは核兵器廃絶を目指し、2007年にオーストラリアで設立された非政府組織（NGO）で、100ヶ国を超える470団体で構成している。もちろん、日本の原水爆被害者団体も参加し、中核を担う働きをしている。平和や軍縮、人権などのテーマに取り組み、啓発イベントを開催し、国連や各国議会での演説などを行っている。核兵器禁止条約が今年の7月7日、国連で122の国と地域の賛同を受け決議された。この歴史的条約の決議に向け、ICANは力を尽くした。

ノーベル平和賞授賞式で、ICANの一員として被爆体験を語り続けてきたサーロー節子氏が聴衆を引き込む感動的な演説をした。サーロー氏は13歳の時、広島で被爆し、家族や多くの友人を失っている。カナダ人と結婚し、核廃絶運動に尽力し、世界中で開かれる国際会議で、被爆証言を重ねてきた人である。

「東京新聞」は11日の夕刊と12日の朝刊で、演説の全文を日本語と英語で掲載し、関係記事も大きく取り上げていた。出席者たちは空しく殺された人々の無念と苦悩を思い、涙したと報じていた。脱原発を目指して運動をしている友人から「日本時間の今朝、早朝、オスロでノーベル平和賞の授賞式があり、ヒバクシャのサーロー節子さんの演説がありました。それを聞きながら、私は自然に胸が震え、涙が出ました」というメールがきた。

「東京新聞」はサーロー氏の演説骨子を5点にまとめていた。① 核兵器は必要悪ではなく絶対悪だ。② 核兵器禁止条約を核兵器の終わりの始まりにしよう。③ 条約は光だ。この光を分かち合おう。④ 13歳の時に広島で被爆。4歳のおいの体は溶けて肉の塊に変わった。⑤ 核武装国とその「傘の下」の共犯者は私たちの警告を心に刻め。

サーロー氏の被爆体験は恐ろしく、悲しく、体験した人の迫りに溢れていた。そして、下記のように語っている。「私は13歳の時、くすぶるがれきの中に閉じ込められても、頑張り続けました。光に向かって進み続けました。そして生き残りました。いま私たちにとって、核禁止条約が光です。」

核兵器を保有する五大国の大使は授賞式に参加しなかった。日本政府は核廃絶には賛成だが、アプローチが違くと核兵器禁止条約に反対した。唯一の被爆国である日本こそが、主導して核廃絶に向け活動すべきなのに、米国の核の傘にあるという理由で、米国におもねった。世界からは批判され、日本には期待しないという声さえある。サーロー氏は「核武装した国々の当局者と、いわゆる『核の傘』の下にいる共犯者たちに言います。私たちの証言を聞きなさい。私たちの警告を心に刻みなさい」と呼びかけている。

ICANのベアトリス・フィン事務局長は核保有国に対して強烈に訴えている。「米国よ、恐怖よりも自由を。ロシアよ、破壊よりも軍備撤廃を。英国よ、抑圧よりも法の支配を。フランスよ、恐怖よりも人権を。中国よ、理不尽よりも理性を。インドよ、無分別よりも分別を。パキスタンよ、ハルマゲドンよりも論理を。イスラエルよ、抹殺よりも良識を。北朝鮮よ、荒廃よりも知恵を。」そして、核の傘にある国々に対しては、「『核の傘』の下で守られていると信じている国々よ、あなたたちは、自らの破壊と、自らの名において他国を破壊する共犯者となるのか」と訴えている。

北朝鮮の核とミサイルを巡って、核の恐怖は増しているが、ノーベル平和賞授賞式でのサーロー氏の演説や関わってきた人々の話から希望を与えられたことは確かである。